

氏名(国籍)	チョムナード・シティサン(タイ)		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	博甲第1,980号		
学位授与年月日	平成11年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	神事相撲の民俗学的研究 —収穫儀礼としての相撲を中心に—		
主査	筑波大学教授	文学博士	平山和彦
副査	筑波大学教授	文学博士	牛島巖
副査	筑波大学教授	文学博士	片岡一忠
副査	筑波大学教授	博士(文学)	池上良正

論文の内容の要旨

本論文は、日本にいけるさまざまな形態の相撲のうち、農耕儀礼とかかわりを持つ民俗としての相撲に焦点を当て、さらに稲作儀礼および畑作儀礼の要素をもつ相撲を総合的な観点から考察することを試みた研究であり、序章・終章をふくめ6章16節で構成されている。

序章「研究視点と研究動向」の「研究視点」では、従来は古代の相撲節会のお話に基づき、相撲は七夕行事と関係があるとみなされ、その年の作柄を占う年占行事だとする認識が学界の主流であったことを示した上で、しかし現代の民俗としての相撲は稲作の収穫期に行われるものが多いことから、相撲を稲作および畑作の収穫儀礼として捉えなおす必要があるとの新たな視点を提起する。また研究方法として、相撲と並列的に挙行される他の行事との関連性を総合的視点から考察する必要があることをのべ、複合性という概念を提示する。「研究動向」では、年占行事の一形態として相撲に言及した柳田国男、および柳田説を踏襲した和歌森太郎の見解を批判的に跡付けるとともに、相撲を演劇の起源論として展開した折口信夫、その他、山田智子ほかの近年における相撲研究の動向を概観する。

第1章「相撲の源流」では、日本の相撲の研究にさいしては他民俗からの影響を無視できないとし、まずスモウの発音を熟語を考察する。後者については、中国では古代以降、角力、相撲、角抵など20余種の名称があるが、なかには格闘技以外の演舞的技芸も含まれるため、実態把握は困難だという。ついで仏教と相撲に類似する格闘技との関連を考察し、さらにガンダーラ美術に登場するバジュラパーニ(執金剛神)像が日本に伝わり仁王像となった経緯を跡付ける。さらに記紀に記された相撲を想わせる格闘技や采女による「女相撲」などを概観したのち、主に古代中国、朝鮮の遺物や墳墓の壁画に描かれた格闘技像について写真や図版をもとに詳細に紹介する。古代日本の場合、人物埴輪に力士像と見られるものが存在する点に特色があり、代表的18例については記紀の記述を勘案しつつ形態や装飾などの諸点をめぐり著書も多角的な考察を試み、遺物資料にみられる古代の相撲形態のうちには中国→朝鮮の系譜をひくものが存在すること、古墳や葬儀との関連から古代の相撲や力士には死者の霊を守る魔除け的な性格がみられるとする。

第2章「神事相撲の諸相」では民俗行事としての相撲をa 娯楽性、b 芸能性、c 神事性の3要素から分類し、cをさらに①農耕儀礼、②奉納、③呪術的神事、④宮座の4側面からそれぞれ代表事例を挙げて概観する。また国土地理協会編『日本祭礼地図』によれば、現代の相撲行事は9～11月に行われるものが約60%、6～8月は約31%を占めることから、稲作および畑作の収穫儀礼として相撲を捉える必要性を論じる。ただし畑作の収穫儀

礼としての事例は僅少であり、大半は稲作儀礼に関わりをもつものとし、泥田での「ドロコ相撲」、田の精霊を相手にするといわれる愛媛県大三島の一人相撲、雨乞いのための女相撲などを挙げ、女相撲については女性の霊力論にも言及する。さらに事例として④の奈良市内の宮座と結びついた相撲のうち、奈良坂の儀礼的な所作のみの相撲を紹介するとともに、四股踏みや足踏みの意義について論じる。さらに古代の相撲節会や中世の諸社における祭礼相撲の場合、いずれも相撲が単独ではなく、舞や流鏝馬など他の行事と並列的に挙行されている事実を明らかにし、ついで現代の事例として滋賀県中山の「いもくらべ神事」における相撲を典型例として挙げ、他の並列的な行事によって相撲自体が性格付けられる例のあることを指摘する。

第3章「稲作における収穫儀礼」では、前記の奈良市の事例を中心に考察する。市内14か所には注目すべき神事相撲が伝承されており、その半数は宮座の秋祭りに付随している。著者は文献と自らの調査資料に基づき、当該地域の政治・宗教の歴史を概観して春日大社の影響が当地方に及んでおり、春日若宮祭の田楽系芸能の系統をひく相撲と、農耕儀礼的な性格の強い地域独自の相撲の2系統が併存するとする。ついで西九条と奈良坂の詳細なモノグラフを提示する。双方とも相撲ということばが用いられ、土俵上での取組の所作は見られるが、競技には至らない。しかし著者は相撲の前後に行われる大蛇を模した松明の巡行、コモないしムシロの土俵、奈良坂での相撲人による「ホオーイ（穂多い）」という発声、最後に配られる円錐形の「相撲の餅」等の考察により、これらが稲作の収穫儀礼を示すこと、しかし「相撲の餅」には穀霊信仰がうかがわれることから、一部には翌年に向けての予祝儀礼が存在することを解明する。

第4章「畑作における収穫儀礼」では、初めに鹿児島県知覧町の有名なソラヨイ行事が扱われる。小野重朗が、ソラヨイ（そら良い）という掛け声は子供たちが扮する神が作物の出来や村を祝福する意味だとし、さらにカヤ集め、綱引き、ソラヨイ踊り、相撲という一連の行事を畑作の収穫儀礼と解釈したのに対し、著者は大局的には是認しつつも、収穫儀礼説に対しては、祈願祭の一種ではないかと疑義を呈する。しかしこの事例は、相撲そのものには神事性は見られないが、行事全体に位置づけるならその祈りの相撲も神事相撲の範疇に属するという意味で、複合性の概念の有効性を示す典型礼だとみなす。ついで著者が調査を行った群馬県長野原町のダング（男の子を意味するという）相撲と、同じく沼田市のワラ相撲といういずれも畑作儀礼としての子供相撲を紹介する。そして双方の子供相撲に付随する所作や並列的に行われる諸行事、および行事の背景を詳細に分析することにより、両者とも麦の収穫儀礼であること、さらにはいずれにも修験道の影響がうかがわれる点を論証する。

終章「総括と展望」では、本論文の要旨を整理するとともに、相撲にまつわる秋の収穫儀礼のなかにも翌年への予祝儀礼を内包したものであること、本土でも温暖な地方では7月頃でも収穫儀礼が見られること、群馬県の長野原町の事例については修験道の入峰修行としての相撲が影響を及ぼしていること、などが改めて指摘される。また収穫儀礼における相撲には勝負が重要視されていない事実が確認され、その代わりに力士の象徴性や相撲の呪術性が強調される傾向にあるのではないかと仮説が提起する。さらに複合性の問題については、舞や綱引きなどと相撲が組み合わせられることの意義が残された課題であり、相撲と修験道との関わりの問題と同様に今後さらに一層の究明が必要であるとする。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、民俗学ではその年の農作物の作柄を占う年占行事の一環として論及されてきた相撲を、稲作および畑作の収穫として捉える必要性を提唱するとともに農耕儀礼の諸要素を内包する「神事」の範疇を明確化するために、複合性という分析概念を提示した点に特色を持つ研究である。

複合性の概念は、民俗としての相撲の多くが舞や綱引き等の他の行事とともに挙行されることから、それらを総合的に把握する必要性を喚起する意味をもつが、さらには、相撲には神事性が見られないものでも、他の並列的な神事行事との関わりにおいては神事相撲として捉えうるものがあることを明示する意義をもつ。本論文では、

そうした枠組みのもとで収穫儀礼としての相撲を考察することにより、ソラヨイ行事や「いもくらべ神事」に伴う相撲も、神事相撲として捉えなおしており、その意義は大きい。さらに神事相撲のうちでも収穫儀礼としての相撲に視点を据え、麦作の収穫儀礼としての相撲が群馬県下に2事例存在したことを実証したこと、さらにはそこに修験道の影響が見られる事実を解明した点は特筆すべき成果といえる。その他、収穫儀礼のうちにも来る年の予祝儀礼が混在している事実、あるいは収穫儀礼としての相撲の多くが儀礼的な所作のみである事実、等を論証している点もまた、重要な観点を提示するものであり、著者の研究資質と力量を示すものである。

しかし、古代における内外の相撲に類する格闘技については、広く資料を蒐集して適切な整理がなされているものの、後代の日本の相撲との異同に関しては、論述にいま一つの工夫が望まれる。

本論文はこうした課題を残しているものの、従来の相撲の民俗研究に対して新たな視点と知見を実証に基づく考察によって提示した意欲的労作であり、学界に大きく寄与しうる成果として評価できる。

よって、著者は博士（法学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。